



號 三 十 四 第
 月 四 年 六 十 和 昭
 行 發 日 五 回 一 月 每
 錢 五 金 部 一 價 定 誌 本 一
 錢 拾 六 金 (共 稅) 年
 一 才 田 杉 兼 行 發 人
 一 七 西 路 區 區 京 市 京 東
 社 信 通 盟 同 所 行 發

正確と迅速に就いて

通信局長 鷹 嘴 壽

我等の三大綱領たる「報道報國 正確迅速、大同結盟」の實踐については社員同心を協せて日夜これが遂行に努力してゐる所であるが、編輯部面に關しては二月號紙上松本編輯局長より指導理念について所説を述べられた次第もあり取て蛇足を加ふる必要はない。

迅速の價値

近代新聞通信事業の發達の跡を顧ると、假令その多くが資本主義的乃至自由主義的機構の所産であつたにしても、その本質に於ては正しく、報道の正確と迅速を追求して止まざる人類自然の欲求と、これが實現のための苦戰苦闘史そのものであることを發見するであらう。

間的觀念はその認識を一變し、先人の理想であつた「千里比隣」は茲に現實の姿となつて現はれた。支那大陸のニュースが三十分を出でずして放送電報となつて現地のデスクへ打返されてくる事實は、東京市内の同報電話と臺灣の受電とが同時刻であると同様、先人の夢想だになつた所であらう。かくて臺灣の新聞は半日のスピードアップが出来、日滿支二帯は同一市内にあると同様の状態となつた。更に電波の威力は世界の通信情勢を一變せしめた。歐洲の新興諸國は在來の英佛通信社依存主義を一擲して「東亞のニュースは同盟から」の直接受信に改めた。ルーマニア、ブルガリア、ギリシャ、トルコ、イラン、アフガン等皆然り中南米も亦同様である。由來外國の放送電報を絶対に聴取しない方針を押し通して來た米國 A P すら東亞のニュースに關する限りその方針を改めざるを得なくなつた。獨、伊、英、佛、蘇の如きは固より言ふまでもない。

勿論世界情勢の變化といふ大きな原因もあり、又同盟ニュースの内容が公正妥當にして信頼に値するといふことがその根本要因であるが、無電の威力によつて迅速

報道の「科學する心」

かくて報道の迅速といふ點に於ては、近時面目を一新した觀があるが、吾々は未だこれを以て満足すべきではない。科學の進歩は更に分秒の差を縮めつゝある。通信の安定度についてもまだ、研究の餘地が多分に殘されてゐる。科學的技術的研究は決して科學者のみの獨擅場に限らるべきではない。通信を擔任しニュースの速達に日夜心を勞してゐる我々同人は科學人たる而非科學人たるを問はず、自ら進んでその實際的經驗と仕事の本質が要求する一切の理想を實現すべく、常に「科學する心」を以てその職域に臨むべきである。結局機械や設備はこれを運用する者の心構へに依つてその價値が決するのである。

設備は大に改善整備すべし、唯だこれを持んで意を安んずべからず、眞にこれを有効適切に活用しその機能を十分に發揮せしめるこそ通信當事者の夙夜念慮すべき所である。設備の複雑化と高度化は益々綿密なる用意と企畫的創意とを運用者に要求する。

凡そ通信の所要時間はその經由する各部署の經過時分の總和である。随つて各部署々々に於て夫々經過時分の短縮を圖ることの協力如何が最終的成果を決定することになる。一分や二分遅れたつて大

正確の尊重

した影響はない」と考へることは大間違ひである、それは恰度特急列車に乘運れた場合の結果を想像するがよい。聯營報典の中に「出發點に於ける一瞬の差は究極に於て往々長時間の大差を招くに至る」ことを特に書き加へたのはそのためである。

局部的には夫々理想通りの成果をあげてゐても、究極に於て芳ばしくない成績を見る場合が往々ある。これは機構組織の缺陷か、企畫上の罪か、協力の不足に基くものであらう。ニュース送受に際しては單に自己の擔任範圍の責務を果すのみを以て足れりとせず、その取致に係るニュースが新聞紙上に掲載頒布される迄の一切の経路に留意し、究極の成果を擧ぐることに努力すべし」といふ點も同操典に於て力説せる所である。部分

向上の研究は常に全體的综合果といふ軌道の上に立つて考究されねばならぬ。

次に「正確」の問題であるが、速度の向上に比して通信の正確性が果して幾何の進歩を見せたであらうか。

読み手の思慮と送話技術、受け手の判断と速記技術に依つて電話速記は、本質的に幾多の危険性を藏してゐる。所謂送話の名人、速記の神様が揃つたとしても誤謬の絶無を誰が保證し得やう。又國字をその儘送れない電信技術に於ても通信の絶対正確がどうして期し得られやう。

假令寫眞電送のみが原稿の通りを正確に送り得る唯一の方式であるとは謂へ、今日の實狀に於て時的間的にも經濟的にも刻々のニュース傳送用としての實用價値は未だしと云はざるを得ない。この價値こそ過去に於ても現在に於ても凡ゆる通信人が苦闘を續けて居る所以なのである。而してその缺陷を防ぐために、曰く技術の練磨、曰く常識の涵養、曰くニュースに對する鋭敏なる感覺、曰く時局に對する正しき認識、曰く責任感に基く周到なる注意、而して最後に和協的精神と再務改善に對する積極的熱情等、總て精神力を以て圓ひ抜いて來るのである。固よりこれらの要素は通信設備の良否に拘らず當然不可缺の要件であり、今後に於ても通信報道の職域にある者の須臾も怠るべからざる要件ではあるが、現在我々に課せられた歴史的的重大使命は過去の何れの時代にも於ても経験せられざる深刻さと重大さを以て、通信の正確性を我々に要求してゐることを何人も自覺すべきであらう。嘗て國際通信時代に總支配人ラッセル・ケネデー氏は各通信室の電話機の前に「Accuracy First」の標語を掲げ特に經濟通信の正確保持について喧しく言つたものである。

時代は變つても「正確第一」の趣旨に渝りはない。只だその根柢をなす指導理念に於て單に「通信社の信用問題であるといふだけの往時に比し、今日ではそれが國の要求に基く崇高なる使命であり大業翼賛の途に開ひ奉る所以であることの重大なる自覺と名譽の上に立つて遂行する所に、重大なる意義が存するのである。この信念の下にこそ一身を獻げて報道報國の至誠が披瀝せられ、脈々たる生氣は職場に躍動し、能率の向上と周到なる注意力の結集に依つて職責に過誤なきを期し得らるゝのである。

苟くも誤りを起し易き原因があらばこれを探索し検討し、防止對策を科學的に技術的に研究し工夫し、これを實踐することに依つてその禍根を絶ち改善の實を擧ぐべきである。

只だ從來の慣習の上のみ立つて一日を糊塗し、事故の起つたとき「以後注意しませう」といふだけで職域奉公の名を辱かしめるものである。

殊に通信聯絡の仕事は「通信社の神經系統にして、その一部の支障又は一員の過失と雖も、直ちに社務全般の蹉跌を招くことあるべきを牢記し、各員は細心の注意を以て事に従ふべし」といふ一ヶ條が自ら筆をとつて書入れられたものであるが、今日はその重大性が愈々加重し一身一社だけの問題でないことを銘記すべきである。

科學の進歩と技術家の苦心研究の結果は、從來不可能視せられていた國字傳送の實用機を正に完成の域に齎らんとしてゐることは衷心歡びに堪へぬ所であるが、如何に利器が整備しやうともこれを運用する者の心が一つで、マゼノ線は一夜にして崩壞することを忘れてはならぬ。

通信の正確と迅速は個々の當務者や個々の部署のみが如何に萬全を期し得ても、縦の聯絡、横の繋がりがあるものが悉くこれに即應して協力一致眞に一心同體の活動を完うしなければ、その効果は決して擧がるものではない。

眞に大同結盟の精神を體得し、自己の立場や感情を離れて相手の弱點を補ひ自己の短所を是正し、相倚り相助けて使命迄に一路邁進することによつてのみ、その成果を期待し得ることを特に強調して已まぬ次第である。

★ ★ ★ 協力と結盟精神

フラインダーに覗く上海

中支總局寫眞部長

藤井信次郎

寫眞と支那紙

新國民政府の健全なる成長ととも、支那新聞界—所謂汪派の—發展もめざましい。そしてそれらの新聞がいつもニュース寫眞を要求する傾向が非常に強い。併し何と云つても紙面は政治記事が斷然優位を占めて、從つて寫眞もこれに關するものが一番掲載される。社會的的アングルのものは假令新國民政府治下の特筆すべき事柄—われわれのニュース・センスがさうとしても—でも顧みない。これは獨り寫眞に限らず新聞全體として—或は政府自體としても—まだその餘裕を持たないといふのが至當だらう。日本の材料では、殆んど政治もの(外交を含めて)に限られてゐる。それも有名な個人を中心としたもの近衛公とか、松岡外相とかのポトリートに近いものが多い。

從つて中支總局では資料寫眞、殊に人物寫眞が非常に重要な役目を持つ。だからわれわれは何時でもこれに應じられるやうにせねばならぬ。人物のほかには日本政府の施設や、日本の風景などを要求されることも少くない。事變と滿洲の寫眞は絶對に使はない。これは新國民政府の複雑な性格から當然のことであらう。歐洲の戰況寫眞は相當便ぶ。何か頼みて他を言ふの感があつて面白い。

外字紙と寫眞

上海における外字紙及び外國特派員には、同盟の寫眞も「プレスユニオン・フォトサーヴィス」の名で配給される。これは一枚賣りであるが、要求する種類は普通ジョーナリズムの原則に基づくとと思へば間違ひない。人物寫眞も支那紙と同様だが、こゝでは特に軍人を見せる眼録が分るやうな氣がする。この外日曜にグラフィックを持つ社が相當あるので組み寫眞を提供する要がある。最近ヒットしたのは上海の乞食收容所の寫眞だ。こゝで當然問題になるのは寫眞による國策宣傳だ。これははなはなしく、樂な仕事ではない。よくある日支親善風景—日本の兵隊さんが支那の子供にお菓子を與へてゐる情景、姑娘と日本娘が手をくんで歩いてゐる情景—これ等は決して作つたものではない。われわれがよく現地で目撃する事實だ併し現實と効果は必ずしも正比例しない。かうした寫眞が時に第三者に逆用される危険がある。宣傳は既に一つの競争だ。從つて作戦が必要だ。潑刺たる支那のすがた明朗な支那人のすがた、これで澤山だと思ふ。新國民政府治下に織り出される潑刺明朗なる生活を見て、支那民衆の幸福を想像することが出来たら、これはとりも直さず日本の宣傳が百パーセント効果を上げたことになりはしないか。

支那人カメラマン

南京の同盟寫眞部には中央社に屬する支那人カメラマンが澤山ゐる。寫眞技術全體から云つても無論だが、ニュース寫眞で彼等の遅れてゐることは非常なものだ。まだ全然出發途上にあると云つても

よい。先日東寶の「支那の月」の撮影隊の一行が南京に行つた時のこと山田五十鈴と汪洋の兩女優が林伯生氏を訪問した寫眞が二枚に別れて而も兩方ともそれ、林伯生氏と握手してゐる情景が同じアングルにて撮られてゐる。そこで僕はこれを撮つた支那人カメラマンに「何故三人を収めて一枚にしたのか」と尋ねた所彼曰く「私も

戦線より歸りて

政經部 中村信

今般召集解除に相成りました。私の當初從ひました北支方面殊に山西の山嶽戦に於きましては、派手な戦争はなく、それだけ皇軍ならでは全く寫し得られぬ堅忍自重、百折不撓の連續で、坦々と續く砂塵道も戦つたる岩山の上にも皇軍の、戦死勇士の汗と血が刻まれて居るのであります。

私は〇〇輜重部隊に屬して居りましたが、後方擾亂の魔手を縱横に張る北支に於きましては輜重兵は決して守勢の部隊ではなく、量的には或は最も激戦を経験する部隊であるとも云へるのであります。殊に峻険なる山嶽地帯へ共匪を殲滅に行く歩兵部隊へ彈藥糧秣の輸送に當る輜重兵中隊はその輸送路の至る處に執物なる敵を持つだけに屢次の激戦に鍛へた旺盛なる突撃精神に培はれた立派な戰鬥部隊であります。炎天砂道、尺餘の泥濘強行軍は勿論、輜重部隊には付き物で或は馬も流される急激なる渡渉、馬も進めぬ路なき峻険となり、彈藥、糧秣を自力により第一線部隊へ運搬する。かかる時には必ず小銃敵の掃射を浴びる歩兵隊の掩護射撃の下を敵弾をく

さう思つたけれども、宣傳部でアルバムを作るのであつるやうに云はれた。支那では寫眞の効用はすべてかう云ふ風に考へてゐるんだ。記念攝影的に、アルバムの爲に。生きた事實の一斷面を捉へるニュース寫眞の訓練は少しも出来てゐない。

これを訓練してゆくことも我々の任務であり、文化提携の日本の仕事でもあらう。

ぐり乍ら特務兵は彈藥箱を米俵をかついで行く。學者も官吏も醫者も商人も百姓も熟鐵一丸となつて任務達成の爲め黙々と死力を尽くす。人間最高の容姿を屢々見ました。二日も三日も飲まず食はずでよくあの精力が出るもので、そしていざ糧秣交付の場合には、敵襲その他で消耗したのももチャンと規定量を交付する。自分の命とたのむ大切な糧秣で消耗糧秣をうめ合せてゐるのです。そして生き残りをこらへて次の輸送に當る。生死を超越したものでなくては出来ぬことです。特務兵の勞苦は彈藥、糧秣を交付して第一線部隊の奮闘する姿を見た瞬間ケロリと忘れてしまふのです。

アルゼンチン便り

ブエノスアイレス支局長

津田正夫

十二月十七日任地ブエノスアイ

十二月十七日任地ブエノスアイレスに到着しました。聞きしに優る大都會で恰も米國式の都市計畫にフランス風の裝飾を加へたとでも申しますか。街々の華麗と全市百幾つかの廣場など、殊に街路樹の美しさは到底パリの比ではありません。これには一驚致しましたが而も國民の生活態度は見たところ丁度人民戦線内閣當時のパリの様な氣がしてなりません。如何に生活を享受するかと云ふことに専念して居る様に見えます。

經濟支局の方向

福井支局

今迄の福井支局は生糸人絹に關聯して、株式の歩みを敏活に報道し、福井から全國にその材料が飛んで相當の動きを生ぜしめたもので、尙ほ今日に於てもその片鱗は發揮して居り織物王國の一要素であるが、相場の高い安いを争ふ事態もいよいよこの上半期一杯と云ふ所迄来た。人絹織が指定生産命令となり、七月—九月は全面的に指令されるし、又絹織及交織の指定生産も案外早い様で、これには支社同人一同對策に稍苦心してゐるところで、又新聞通信にしても福井新聞のみでは期待出来ぬとも云ひ得る。尤も經濟機構は變つても人は同じだし、大同盟の報道網を充實して、業者との緊密なる提携を圖るに於てはもとより輕率な悲劇は無用である。但し本社に於て特に經濟方面に於て英米依存經濟通信に偏することなく、國力即經濟戰の觀念の下に取材整理に更に一層の努力を加へ、經濟人を取り下して行く材料の蒐集報道にも準備が緊急である。經濟支局の今後の活動はむしろ有意義であると考へられる。

松岡外相に隨行して

岡村次長歐洲へ

既に新聞紙で御承知の通り本社編輯局長岡村二氏は、松岡外相一行に加はつて、去月十二日東京發渡歐した。一行中唯一の報道人として言論界の絶大な期待の下に、御本人も頗る張り切つて出發されたが、何がさて出張と決定したのが出發の僅か七十二時間前、日頃「新聞、通信記者が出張を命ぜられる時は、一時間後の汽車で發つて」といはれてもまごつくやうぢやいかん」と口癖のやうにいつてはあだが、いざわがこととなつて見れば、而も次第によつてはベルリンでヒトラー總統と握手をしようといふ大役、出發準備には相當忙しい思ひをされたやうである。

メキシコ

久野茂男

二月二十日飛行機で着任してから早くも月餘になります。さてメキシコへ乗り込んだ最初の印象ですが、まづこの國が餘りにも支那に似てゐるのに一驚したことです。況アメリカ旅客機が密雲を抜けて重疊たる山岳の間に廣漠たる盆地を見出し、やがてグーツと急降下をして眼下四、五百米の處にメキシコ市が突如くつきりと浮き上つて来た時、窓硝子に額を押付けて瞬きもせず眺めてゐた小生、思はず「あつ支那だつ」と叫んでしまひました。だつ廣く寝をべつてゐる白ちやけた、埃つばいメキシコの市街、殊にその住宅の構造が、空から眺め下すと、まるで支那家屋をつくりなものです。タキシードで市中に向ふと、その途中の風景が何と又支那的なこととせう、ごみくした小さな家の前を歩いてゐる人間の薄汚なき頭髪が黒いところに顔の色が茶色です。すつかり條件が揃つてゐるのです、しかし暫く住み馴れてみると、最初感じた程には酷い處だとは思はなくなりました。

米國小説に描かれた「同盟」

南京支局臨時在勤

兒 玉 正 彦

一九四〇年度アトランティック一萬弗賞を獲得したニーナ、フエドロバ女史作小説「ザ、フアミリー」の一節にわが同盟通信が描かれてゐるので一寸御紹介する。此小説は日支事變勃發の頃、天津租界に下宿屋を営んでゐた一家族を中心とし、是に間借りをする各個人を舞臺に登場せしめ、錯綜する個人の思想と戀愛を描いた上海復刻版第百四十六頁に上る大作でその第一部六十八頁に左の一句がある。

turned to the boarding-house. The grinning fair thanked Granny and mother for their attention to the old Japanese lady, and took her away. Only three of them remained to live in the house. They gave Granny a box of Meiji biscuits and a silk neckerchief as a present for the extra trouble during the siege. At the expense of the three Japanese gentlemen a radio was installed in the hall of the house.

三人の日本紳士は、自分たちの費用で、下宿の廣間にラジオをとりつけた。それは善響の旋風をもたらした。「同盟」ニュースが日本の勝利を、高らかに叫びつづけるか、と思はば、傷ついた獲物のうめきや憤怒の叫び聲、それからまた、援助と正義を求める叫喚が、支那政府の本據、南京から聞えて来た。

その他、未だ結果に達しない功績を誇らしげに吹聴する數回の演説が、ソ聯から遠雷のごとく響いて来た。それに負けずに、ヒトラーがスクリンから嗚鳴つてゐた。すると今度は、甘美な音楽が、パ

應各種の近代施設も整ひ、むしろ此の頃ではこんな山奥によくこれだけの都市を築いたものと感心して見る雅量も持てるやうになりました。併し「メキシコは米州の支那である」といふ小生の第一印象は、その後この國の政情や習俗を知れば知る程薄らぐ所か、反つて益々強まつて来るのです。例へば甚だ卑近な一例ですが、メキシコの所謂インテリ層は英語を話せる事を最も得意と心得てゐる點、これに反し一般民衆は酷く無智低級で、萬年筆などうっかり上衣の胸のポケットにさしてをくとどんと突き當られた途端に、忽ち姿を消してしまふなんてところは、香港をつくりて海野君などは道を歩いてゐる最中に後から走つて来た自轉車に帽子を撞拂はれたといふ珍談さへ持つてゐる程です。こんな處ですから、我々の仕事としても何等纏つた組織がある譯です。

It brought in a whirl wind of sounds. A Demei dispatch would pour with Japanese victories, voices of wounded prize and indignation and cries for help and justice resounded from Nanking, the abode of the Chinese government; crashing speeches thundered from Soviet Russia, exulting over the deeds that yet must be achieved; Hitler rumbled from Berlin, and enchanting music poured from the Grand Opera of Paris.

四人の日本紳士が、微笑し、そして會釋しつつ、下宿に歸つて来た。かれらは、日本の老婦人に對して親切にしてくれたといふので、グランニイとその母親に、禮をのべて、それからその婦人を伴れ去つた。

三人だけが宿に残つた。かれらは、籠城の間、特別に世話になつたからといつて、グランニイに、明治製菓のビスケット入り一箱と絹製頸巻きをプレゼントした。(中略)

三人の日本紳士は、自分たちの費用で、下宿の廣間にラジオをとりつけた。それは善響の旋風をもたらした。「同盟」ニュースが日本の勝利を、高らかに叫びつづけるか、と思はば、傷ついた獲物のうめきや憤怒の叫び聲、それからまた、援助と正義を求める叫喚が、支那政府の本據、南京から聞えて来た。

マニラ支局移轉

今般左記へ移轉 (但し郵便物は従來通りの私書函宛のこと) Domei News Agency, Apr. No. 2, 1119 A. Mabini Manila. P. O. Box 391, Tel.: 5-65-12

お願ひ

南京の兒玉氏から上掲のやうな寄稿を頂いた。先月號で地方からの通信を希望したところ早速數通の原稿を頂いたが、兒玉氏のやうな御注意も有益だと思ふ。あまり手前味噌では仕方がないが、折に觸れ時に「同盟」が内外でどのやうな眼で見られ、どんな評判をとつてゐるか、エピソードで結構だから注意して通信して下さい。(社報編輯係)

新支局開設

今般左記に豐原支局を新設四月一日より正式事務を開始した 澤太豐原町大通南六丁目 同盟通信社豐原支局 支局長 荒尾 弘

同報受信所落成

熊本支局

遷居省の手によつて三年の日子を費し建設中であつた熊本市外、龍田同報無線受信所竣工し三月二十八日盛大な開通式を舉行、本社から豐原通信局長が臨席された。同受信所は地上百五十尺の大鐵塔三基、附屬機械室その他の廳舎より成りここでキャッチされた電波は八キロのケーブルによつて同盟熊本支局に導入される。

南支總局移轉

今般左記に移轉

廣東市廣衛路第二十二號 同盟通信社南支總局

人事(月)

海外へ 秋元義彦(通信) 平山宗兵衛(經濟) 齋藤惣次郎(經濟) 浦田義夫(秋田) 小椋邊定吉(釜山) 仙臺磯崎安雄(通信) 豐原松田時市(長野) 馬場繁治郎(札幌) 小椋野英仁(通信) 長野岡本一男(福岡) 平塚肇(京都) 編輯若松喜久治(金澤) 札幌佐藤敏(旭川) 小椋荒井秀信(札幌) 金澤太田康正(編輯) 總務中村信(總務) 編輯藤倉吉藏(名古屋) 菅原金吾(編輯) 名古屋 新入社 佐藤哲郎(豐原) 諏訪英一(天津) 星野又三(通信) 菅原金吾(編輯) 窪田袈裟重(長野) 海野居朗(通信) 鳥居四郎治(通信) 天野四郎治(通信) 高橋清(通信) 角田又郎(通信) 井下悦二(通信) 高橋恒三郎(秋田) 小川優(編輯) 塚越正(函館) 山城千恵子(長崎) 萱島智恵子(總務) 渡邊一(名古屋) 復職ヲ命ス

休退職 谷中久登(天津) 木村善次郎(札幌) 中島源太郎(神戸) 關森シゲ(下關) 藤村富士太郎(編輯) 新沼五郎(福岡) 佐藤絢子(大阪) 久代きよ子(總務) 前原静江(桐生) 植月俊雄(長崎) 中谷政雄(下關) 廣田榮子(通信) 久保田幸次郎(通信) 荒野愛子(總務) 法領田亮一(岡谷) 陳金源(廈門) 大野彌生(編輯) 酒井敏隆(編島) 辻敏一(北支) 依願解職 福永陽三(福岡) 休職期間満了ニ付退社 岩立一郎(中支) 山崎利夫(札幌) 休職 其他 高田傳 調査局ノ事務ヲ囑託ス 李水樹(臺北) 里見安雄ト改名 相良一雄(休職)

結婚 鶴松義治(通信) 富田市之進(東京) 元一瓊(津城) 松尾全(通信) 甲野全(關門) 廣田榮子(通信) 高島修三(經濟) 田中耐六(編輯) 福田實(編輯) 入營・應召 阿部正文(青島) 津田榮太郎(南支) 杉山忠雄(大阪) 黒澤正一(大阪) 太田康正(編輯) 中島軍次(福岡) 出生 吉井孝之丞(鹿兒島) 熊木啓作(編輯) 村川武躬(福岡) 中村仲康(編輯) 川口孫三郎(旭川) 高羽敏是(神戶) 伊藤壽雄(編輯) 高野太一郎(通信) 山崎利夫(札幌) 穂谷四郎(廣島) 龜井種治郎(大阪) 内本誠止(大阪) 小栗周三郎(經濟) 奥宮正澄(總務) 久保田清松(調査) 見舞 秋葉武雄(編輯) 坂本光一(大阪) 大野彌生(編輯) 湯川潔三(名古屋) 田崎與喜衛(調査) 石川元吉(福岡) 吉岡須磨子(經濟) 河野賢(神戶) 柴山善一郎(神戶) 長女病

退社 高木凱人(編輯) 内海朝次郎(調査) 葛野辰藏(通信) 秋葉武雄(編輯) 江原順一(清津) 宮城清(經濟) 葛野辰藏(通信) 大野彌生(編輯) 上田ツネ(編輯) 白仁田宗太(京都) 神坂鶴太(編輯) 田崎與喜衛(調査) 結束武二郎(總務) 武内達雄(通信) 伊藤藤廣(釜山) 山岡勤三郎(經濟) 末永房太郎(編輯) 長谷川仁(編輯) 大峽義雄(高知) 船木光俊(香港) 松崎數義(南京) 洪鍾笠(京城) 土屋志氣雄(仙臺) 廣江要藏(總務) 廣田喜久二(岡山) 吉田松治(通信) 前島光太郎(總務) 渡邊秀雄(通信) 百井信二(仙臺) 武者幸四郎(調査) 葦田ミツエ(大阪) 山本孝子(經濟) 今井よし(經濟) 松永一夫(調査) 渡邊清(横濱) 菅野浩歌(名古屋) 大橋道男(京都) 小椋道子(總務) 佐藤シゲ(下關) 新沼五郎(福岡) 久保田幸次郎(通信) 廣田榮子(通信) 荒野愛子(總務) 中谷政雄(下關)

互助會報告(三月)

調查部から

昨年四月から着手した調査部(資料)も一年経つたので、稍見るべき陣容が出来上つた。本社編輯局、調査局、通信局の各部からは毎日十、二十回の調査依頼があり圖書類の貸出しも激増してあるが尙地方からの利用が比較的不足してゐる憾みがある。連絡上の不便もあるが、簡単なことなら、電話で即刻御返事するし、長いものは文書で御返事する。先般の地方支社局長會議のとき御願ひした地方資料はその後續々調査部へ流れこみ、その都度御禮申上げてゐるが尙ここで改めて謝意を表し、今後とも御協力の程御願ひする。地方から調査部を利用する上で一體調査部ではどんなことが判るか、それが判らぬため利用も出来ぬと考へてゐる向もあるかも知れぬので、一應御注意まで例を上げて見ると、 某々の略歴住所如何? 某事件の時日如何? 等からははまつて、要するに一度新聞乃至雑誌に出たことなら、いかなる角度からの質問でも差支へない。昨春秋、某支局から、事變勃發以來、當縣出身者にして殊勳甲の恩賞に與つた者の名前と略歴等を調べてくれとの依頼があり、何分調査部開設前の資料を要するため、稍時間を要したがそれでも短時間の中に調べて、大變感謝された例もある。地方新聞社からの調査依頼も(營利的企畫と思はれるものを除いて)喜んで受付けるから、支社局でその仲介をさされても差支へない。

尙、海外支局の方に、先般調査局長より文書で御願ひしたところだが、各局の人名録、官廳、團體職員録の類を努めて御送付下さるやう切に願ひしたい。地理書、案内記の類も大變役に立つので、觀光案内所のパンフレット式のものでも結構です。